

館報

庄内



庄内地区	
平成29年1月1日現在人口	
世帯数	6,815戸
男	7,508人
女	7,472人
合計	14,980人
庄内地区公民館 発行 (ゆめひろば庄内)	
電話	24-1811
FAX	24-1812

公民館の歴史 節目の年を迎えて

昭和22年に発足した松本市の公民館は、平成29年に70周年の節目を迎える。公民館は、住民の交流と学習拠点の場として整備され、これまで多くの住民が集い、親睦を深め、地域課題の解決に向けて取り組んできた。

市町村合併や人口増加等の中で、地域拠点としての公民館は、少しずつ数を増やし、現在36館となった。

我々庄内人が拠点とする庄内地区公民館は、開館が平成18年4月である。松本市は各地



区の公民館の整備を平成7年から開始し、庄内地区公民館が、合併前の旧市29地区の最後に完成したのだ。それまでは隣の松南地区と共に南部公民館のエリアの一部であった。

その南部公民館が発足したのが昭和62年4月。上記写真は昭和63年に発刊された公民館報なんぶ版第1号である。

当時、地域行事や学習活動が盛んなものの、公民館や地域活動での男性不在が課題のようであった。高齢化社会を懸念する記事もあった。

現代は身近な道具が進歩し、便利さは追求されているが、当時からの問題はどれだけ解決されたのだろうか。

私達の公民館

庄内地区公民館は、ゆめひろば庄内という複合施設の一部であり、駐車場の広さから他の公民館よりも使いやすい、庄内地区内外から大勢の方々に利用されている。現在、公民館を利用したいと申し出のあったサークル活動を行う団体数は200に迫る勢いである。

しかし、公民館に訪れる方々はそれだけではない。夏場ふとロビーに目を向けると学生たちが涼みに来ている。道路事情に詳しくない県外からの観光客が地理を教えてほしいと窓口に来る。冬場は温かい飲み物を抱えて休憩しているご年配の方がいる。大勢の方々が行きかうから、季節感を味わってもらおうと、ロビーに展示する鯉のぼりや門松等の飾り付けにも力が入る。

そんな季節の風物詩の前で賑やかにしているのが、保育園児等の子ども達だ。友達同士ではしゃぎ回り、時に大声を上げている。あまりに元気

すぎるため、お母さんに注意されてしょんぼりしている姿もまた微笑ましいところだ。

さて、そんなお母さんたちは、普段どんなお気持ちで公民館を訪れているのだろうか。館報編集委員会ではインタビューを行った。

● Aさんの場合
「今日は子ども達とプールに来ました。子ども達は家ではしゃいでしまうので、プールの机を借りて宿題をさせています。こういう静かな場所だと勉強がはかどるので、土日も利用しています」

● Bさんの場合
「料理教室の帰りです。公民館主催のイベントにもよく参加していきまして、ここには何かとお世話になっていきます。子どもが側にいると落ち着いて料理ができるので、できればキッズコーナーがあると嬉しいですね」

● Cさんの場合
「保育園に子どもを迎えにきて、今は休憩中です。帰ったら夕飯作らないといけないので。ここは天気に関係なく過ごせるので、つつい寄つてしまいます。私の子どもはここで新しい友達を作った事があって、その流れで私もママ友ができました」

元旦は年の初め、去年まであった良い事も良くない事も色々含め、新たな気持ちで希望を持って第一歩をスタートしたいものです。

さて、1月7日は七草粥を食べる正月行事の習慣があります。平安時代頃に中国から日本へ伝わったようです。おせち料理で疲れた胃を休め、野菜不足の冬場に栄養を補う意味もあるようです。七草の名前はその時期には覚えていてもすぐ忘れてしまうものです。セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ、ホトケノザ、スズナ、スズシロ。いい機会なので図鑑を調べて勉強し直しました。

私の母は1月7日生まれでしたが、自身の誕生日であっても七草粥は必ず食卓に並びました。母は私の無病息災を祈って料理してくれたのだと思います。

昨今では正月になればどのスーパーでも七草粥のパック入りが販売されます。今までは手作りだった正月行事が、時代が変わり衰退していくように感じられ、少し寂しい気がしております。(M・O)



三九郎の由来

～起源～

・平安時代の宮廷行事。短冊等を燃やす火祭りが由来

～呼び名～

・人名説(神主 福間三九郎)
・三苦説(凶作、重税、疾病)
(上記以外にも由来は諸説あり)

～他の名称～

三九郎は松本地域独特の呼び名で、他の地域ではサギチョー、ドンド焼き等と呼ばれる。

三九郎よもやま話

- この前三九郎に行ったが、昔と随分様子が変わってたよ。
- 今までは1月15日の小正月だった。前の日にやぐらを作ったら夜通し見張り番をしないと燃やされちゃうんだよな。
- そう。どっかのいたずら小僧がな。うちはわらを盗まれたよ。今じゃあ考えられないな。
- 場所も田んぼだったが今は河川敷だ。どうしてだろう？
- 燃えカスに針金のクズとかが混じるからな。田んぼを貸すことが敬遠されるのさ。
- まゆ玉とかおもちを焼く時か。どうしてまゆ玉を焼くのかを知ってる子どもはいるかな？
- さあ？ おかいこ様が由来とも聞かすが、今の子どもは養蚕業が盛んだったことなんて知らないだろうしなあ。
- 三九郎の歌があったの覚えているか？
- ああ。あのちょっと卑猥なやつか。ちと、孫には教えられないな。
- そういえば、うちの孫が12月に三九郎講習会に行ったぞ。子ども会育成会が主催で、公民館に友達と集まったそうだ。
- きちんと作り方を教えないと後世に伝わらない時代になったのかなあ。
- 来年は孫と一緒に三九郎に行って、火にあたりながら昔話を聞かせてやろう。

12/4

伝統を教わる子どもたち「三九郎講習会」開催



▲三九郎やぐらの作り方を教わる。子どもだけでなく、親も一緒に。

1/7・8

三九郎



立派に組み立てられた三九郎。燃え盛る炎に何を願うのか。庄内地区公民館1Fロビーにて、庄内地区15町会の三九郎写真を展示しております。

親子×地域の人が集い 冬空へ願いを乗せて

平成29年三九郎



平成28年12月4日、庄内地区の小学校5、6年生とその親を対象にした「三九郎講習会」が、庄内地区子ども会育成会主催で開かれた。前半は元小学校長の大輪先生を講師としてお招きし、三九郎の由来、歴史、呼び名等平安時代から続く伝統について学んだ。

後半は三九郎のやぐらを実際にどう組み立てるのか、体験型の学習会を行う。丸太の組み方や縄の縛り方のコツについて経験者の指導を受け、子ども達は実際にやぐらを組み立てたのだった。

一昔前は誰でも知っていたことも、今は経験者がきちんとした形で伝えなければ、伝統行事を続けていくのは難しいのだという。現代社会の特徴とも言える。それが、教える側の大人達も真剣かつ熱心であった。子どもにとってはたった1日のことかもしれないが、必ず今日の体験が後々実を結ぶはずだ。